

新型コロナ対策からウクライナ戦争対策へ（フランス）

廣岡 裕児*

新型コロナの 9 月 25 日現在の直近 7 日間の新規感染者は 243,190 人で 1 日平均にすると 34,741 人、前週は 199,381 人（1 日平均 28,483 人）で 22%増である。新規入院者数も 2931 人（前週 2,432 人）、ICU 入院者 277 人（前週 239 人）、死者は 173 人（前週 164 人）といずれも増加している。19 月の新学年を契機に上昇に転じているので第 8 波に入ったのではないかと、ともいわれている。しかしながら、特別な対策はとっていない。唯一、10 月 3 日から 60 歳以上にオミクロン株対応ワクチンの接種が始まり、ブースター接種の 2 回目（合計 4 回目）のキャンペーンを盛んにしている程度である。

コロナ特別経済対策も完全に終了した。現在は、新型コロナの「保健衛生戦争」に代わるウクライナ戦争の「戦争経済」に入っている。ウクライナへの武器供与に加えて、長期戦を覚悟して、国内でもインフレ、エネルギー不足などにたいするさまざまな施策がなされている。

さて、ウクライナ戦争であるが、湾岸戦争、イラク戦争の時同様、日本とフランスでは情報に若干の差異がある。日本ではあまり話題になっていないが、重要なキーポイントになると思われることがあるので報告したい。

ウクライナ侵攻でプーチン大統領が政府の転覆を狙っていたのかどうかは、日本の専門家のあいだでも意見が分かれている。しかし、転覆を狙っているというのが正しいようだ。

8 月 19 日ワシントンポスト紙が、ロシアの諜報機関 FSB（旧 KGB）の通信傍受記録を含む機密情報や、ウクライナ、米国、欧州の関係者の詳細インタビューから構成される記事を掲載した。同記事によれば FSB は 2021 年にはウクライナ社会がロシアの侵略に抵抗し兵士は解放者として歓迎されないと分析していながらも、この情報をプーチンにあげな

かった。そればかりか、FSB の幹部はキエフへの電撃作戦でゼレンスキー大統領は死ぬか、降伏するか、亡命するかして数日で政府を転覆させることができると仮定していた。

侵攻の当初行われたロシアとウクライナの代表団の 3 回目の停戦協議でも、ロシア側は停戦協議で、ゼレンスキー大統領の退陣を要求していた、という報道はすでに出ている。

先のワシントンポストの記事は、3 月初旬には 2014 年のマイダン革命で失脚したウクライナ元大統領のヴィクトール・ヤヌコヴィチは将来の傀儡政権のメンバーと思われる人々と共にベラルーシで待機していた、とも伝えている。

8 月 4 日 EU は、ヤヌコヴィッチとその息子オレカサンドルを制裁対象に加えた。その理由書にはつぎのようにある。

「さまざまな情報源によると、ヴィクトール・ヤヌコヴィッチ氏は、ウクライナに対する不法で正当な理由のない軍事攻撃の最初の段階で、ウクライナ大統領を自分自身に置き換えることを目的としたロシアの特別作戦に参加していた。さらに、チェチェン共和国のラムザン・カディロフ大統領は、ウクライナ大統領に対し、ヴィクトール・ヤヌコヴィッチにすべての権限を委譲するよう要請した。」と述べている。

プーチン大統領には、ウクライナに是が非でもヤヌコヴィッチ大統領を復活させる個人的な理由がある。

プーチンは 2004 年大統領に再選された。

その 9 月にコーカサスのベスランでのチェチェン反政府勢力による小学校占拠事件が起きた。強行突破で 344 人が死亡し、内外から批判が浴びせられた。プーチンが初めて受ける逆風だった。

* 公益財団法人都市化研究公室特別研究員

¹ COVID-19 : point épidémiologique , Santé publique France、N.135、2022 年 9 月 29 日

ウクライナの大統領選挙があったのは、まさにそのあとだった。

この大統領選挙でまず思い出されるのは、ユシチェンコ候補が突然顔中あばたになった写真である。ユシチェンコの妻はロシアの仕業だとしたが、真偽はいまだ分からない。

アメリカはアメリカ人の妻を持つユシチェンコ候補を全面支持した。プーチンは当時首相であったヤヌコヴィッチを推した。

ソ連の崩壊、冷戦終結後、ウクライナに対してロシアとアメリカは影響力を競い合っていたが、この大統領選挙ではあからさまなぶつかり合いとなった。

第一回投票の3日前、プーチン大統領は、首都キーウでの対ナチス勝利60周年記念軍事パレードに出席し、ヤヌコヴィッチ(当時首相でもある)と並んだ。テレビのインタビューでも、ヤヌコヴィッチ内閣を賞賛した。

決選投票の8日前、プーチン大統領はロシアとクリミア半島を結ぶケルチ海峡フェリーの開通式に参加し、ウクライナのクチマ大統領とともにロシア側から乗り込み、ウクライナ側のケチマ港でヤヌコヴィッチ首相を迎えられた。たしかに二国間を結ぶフェリーであるが、わざわざ大統領と首相が出席するほどのものでもない。

選挙はヤヌコヴィッチが勝った。ところが、国際監視団から不正があったと指摘され、ユシチェンコ候補の支持者らの街頭行動が始まった。「オレンジ革命」である。選挙は無効、再選挙の結果、ヤヌコヴィッチは落選した。

コーカサスの事件はあったにしろ、すべてほぼ思い通りに進み、専制的傾向がはじまっていたプーチンにとって初めての蹉跌だった。

プーチンは現実を認めることはできなかった。そのあと、当時ウクライナとウクライナ経由であった欧州への天然ガス供給を武器にウクライナと欧州を脅す。今日まで続くガス戦略のはじまりである。

2006年、オレンジ革命派の分裂もあって、ユシチェンコ大統領は、ヤヌコヴィッチを首相に任命した。ヤヌコヴィッチは、早速、NATO加盟立候補を無期延期した。

プーチン大統領は2008年9月に公言している。

「ウクライナとは何か？国でさえない！その領土の一部は中央ヨーロッパで、最も重要な部分である他の部分は私たちがウクライナに与えたのだ！」

12月22日プーチン大統領はキーウを訪れ、「兄弟国を助ける用意がある」と語った。

2007年秋の総選挙でヤヌコヴィッチ首相の連立与党は過半数を取れなかった。そこで親米民族派のティモシェンコが首相に任命された。

すぐさま、ロシアは天然ガスを武器に干渉をする。

オレンジ革命の陣営が分裂し国民の支持を失ったこともあり、2010年の大統領選挙ではヤヌコヴィッチが勝った。

プーチンは復讐に成功した。

ヤヌコヴィッチ大統領は横領の容疑でライバルのティモシェンコ前首相を自宅軟禁。2011年10月18日ティモシェンコは、禁固7年の実刑判決をうけ、収監された。このほか、前政権の四人の大臣が、横領と権力の乱用で収監されていた。

2013年10月27日にソチでプーチン大統領とヤヌコヴィッチは5時間にわたる長い会談をおこなった。11月28日に予定されていたEUとの連合および自由貿易協定の調印が予定されていたが、キャンセルされた。

これを契機に、街頭行動が起こり(マイダン革命)、翌2014年2月にヤヌコヴィッチは大統領を解任される。ロシアの手引きでロシアに亡命した。

プーチン大統領は、再度顔に泥を塗られた。

こんどは、天然ガスでの脅しにとどまらず、クリミア併合と東部ウクライナ独立支援をおこなった。

ヤヌコヴィッチは「ネオファシスト」「ナチ」に追われたと公言している。プーチンがウクライナ侵攻にあたって「ナチからの解放」といっているが、プーチンがヤヌコヴィッチにこういわせたのか彼の言葉がもとになっているのかはまだわからない。

先のEUの制裁理由文書はさらに、次のように述べる。

「彼（ヤヌコヴィッチ）は、2014年3月にロシア連邦大統領にロシア軍をウクライナに派遣するよう要請することで、ロシアのウクライナへの軍事干渉に貢献した。

ウクライナで新たに捜査が開始され、ヴィクトール・ヤヌコヴィッチ氏が2人の元国防大臣とともに、特にクリミア自治共和国で、ウクライナの防衛能力を自発的に削減したことが明らかになった。彼は自分自身をウクライナの正当な大統領であると考えており、公の場での発言では常に親ロシアの立場をとってきた。」

フランスの国営テレビ局 France2 のドキュメンタリー番組の中で、2月20日、侵攻4日前、11時から行われたマクロン大統領とプーチン大統領の電話会談がそのまま収録されていた。その中で、プーチン大統領は、現ウクライナ政権を「それは民主的に選出された政府ではない。彼らは血まみれのクーデタで権力を握った。生きたまま焼かれた人々がいた。血まみれだった！そして、ゼレンスキーは責任者の一人だ」と明言している。「クーデタ」とは、マイダン革命のことだ。

ウクライナ侵攻でプーチンが政府転覆を狙っていたとみて間違いないだろう。そして、それはプーチン個人にとっての復讐でもある。

2022年3月1日発信の「レゼコー」紙のジャン＝マルク・ヴィトリ論説委員が面白いことを書いている。

「ウラジーミル・プーチンは、敵対者が自分の財産を優先すると信じていた。彼は、ウオロディミル・ゼレンスキーは自分の周囲のオリガルヒや旧ソビエトの共和国の指導者たちと同じように、金銭に動かされ、スイスの銀行に何十億も隠していて、最初の銃声で国から逃れる人間だと考えていた。しかし、ゼレンスキーは去らなかった。」

イラクがクウェートを攻めた時、政府は国外亡命した。第2次大戦でドイツがフランスに攻め込んだとき、パリ突入が間近になると政府はフランス南西部のボルドーに移った。普通そうなるものだ。まして、ゼレンスキー大統領は、政治の素人である。それに支持率もかなり下がってきていた。

プーチン大統領もまさか、ゼレンスキー大統領がキーウにとどまって徹底抗戦を呼びかけるなどとは思わなかったのだろう。

いずれにしろ、自尊心が高く、何でも思うようになってきたプーチンにとって、三度目の屈辱であった。

第1次大戦の時には、ドイツは電撃作戦により1か月でパリを占拠できるとして開戦し、思わぬ抵抗にあってパリから50kmで止まり、いつ果てるともない戦争になってしまった。

またその繰り返しになるのではないか。さらに加えて、プーチンの私怨がある。今後が危惧される。

(以上)